
STANDING ON THE RAINBOW

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STANDING ON THE RAINBOW

【Nコード】

N3198R

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

故郷から旅立つ俺達七人。その俺達が見ているものは。チェッ
カーズシリーズ第六十弾、まさに彼等そのものを歌った曲です。

第一章

E R A I N B O W

S T A N D I N G O N T H

「これからだぜ」

「ああ」

「そうだな」

七人で言い合う。夜の電車の中で。

今故郷を出た。ここで俺は仲間達に言った。

「東京に出たら一気にいくぜ」

「ああ、メジャーになろうぜ」

「スターになるか」

「絶対にな」

「ああ、なるんだよ」

俺達は意地でもなつてやるつもりだった。俺も含めて七人いる。

リーダーに髭にノッポに色白に細目にそれと俺の弟だ。俺以外のメンバーはこんな感じだ。生まれ故郷を出て東京に出てデビューすることになった。

それで今こうして夜の列車の中でだ。言い合うのだった。

「メジャーにな」

「武道館でコンサートだな」

「それを目指すか」

「それにツアー」

「全国ツアーだ」

本気だった。夢物語を話しているつもりは全く無かった。

「日本全国回ってな」

「それで何処もお客さんで満員だ」

「レコードどんどん売るぞ」

「ああ、やってやろうぜ」

こんな話をして東京に来た。まずはここが何処なのか全くわからないアパートに入った。そこに七人全員で入った。まずはそのぼろさに驚いた。

「まあ最初はこんなもんか？」

「こっから一気に高級マンションに住もうぜ」

「ああ、メジャーになったらこんな場所すぐにおさらばだ」

「そうだな」

こんな話もした。実際に俺達はすぐにシングルを出した。それを三枚出したところだ。一気に人気が出てテレビからも声をかけられた。

それで歌番組にも出てあちこちで歌った。本当にすぐにコンサートを開けたしツアーもやったし武道館でライブもした。しかしそれでもだった。

「これで満足してるか？」

ある時リーダーがこう俺達に尋ねてきた。

「御前等これでな。満足してるか？」

「もっと上かよ」

「上に行けってことかよ」

「ああ、そうだ」

リーダーが言うのはそれだった。

「もっと上があるだろ」

「じゃああれか？」

ここで言ったのはノッポだった。

「俺達の歌でか」

「ああ、もっと上に行こうぜ」

リーダーの言葉はこうしたものだった。

「絶対にな」

「絶対にだね」

ここで細目も言ってきた。

「もっと上にね」

「そう、それと」

「それと？」 8

「俺達の名前をずっと残すんだよ」

リーダーはこんなことも言った。

「いいな、すぐに消えるなんてことは駄目だから」

「それで消えたら駄目か」

「ああ、駄目だ」

リーダーは今度は髭の言葉に答えた。

「ずっと音楽やってだ。それで」

「伝説になるのか」

「いいな、俺達は伝説になるんだ」

リーダーの言葉は強い。本気だった。

「何があってもな」

「七人でだよな」

色白の言葉だった。

「僕達七人で」

「そうだね。東京に出てからもずっと七人だったんだし」

弟がそうだと応える。そうしてだった。

第二章

リーダーは最後にだ。俺に顔を向けて問うてきた。

「それでいいな」

「ああ、いい」

俺はこくりと頷いた。それだけだった。

「七人で伝説になろうぜ」

「メインヴォーカルとして頼むぜ」

「俺だけでやっていってる訳じゃないしな」

俺はこのことはよくわかっていた。俺だけでここまで来た訳じゃない。七人全員いたからこそだ。ここまで来れたってことはわかっていていた。

「七人でな。絶対にだ」

「伝説になるからな」

「ああ」

「それじゃあ」

七人で頷き合った。この時から俺達は俺達の歌ではじめた。そうしてだ。

毎日コンサートにツアーにテレビに自分達の音楽を作ってた。忙しい日々だった。けれど俺達はいつも一緒だったし楽しくやっていった。

それでだ。いつもだった。

マスコミやファンに囲まれてだ。フラッシュの嵐だった。

「うわっ、いきなりかよ」

「眩しいな、おい」

今日もフラッシュを浴びてだ。思わず言ってしまった。

「流石にいきなりなのはな」

「ああ、困るな」

「全くだよ」

思わず苦笑いになる。目にフラッシュが入った。

けれど悪い気はしない。俺はこう仲間達に言った。

「やっぱりな」

「いいものだよな」

「スターになった証っていうかな」

「そうだよな」

こうそれぞれで言い合う。

「ただな、やっぱりな」

「これで終わりじゃないからな」

「ああ、そうだ」

ここでまたリーダーが言ってきた。何かあると手綱を締めてくる頼りになる存在だ。

「俺達自身の歌も認められた」

「けれどそれでもまだ」

「まだあるのか」

「そうだ、まだまだ先はあるんだ」

リーダーの言葉は真面目だ。そのものの言葉だった。

「わかったな」

「ああ、それなら」

「今は」

こんな話をしてだった。俺もここで言った。

「言ったよな。伝説になるってな」

「伝説か」

「それか」

「ああ、そうだ。伝説になるんだ」

こう話す。本気だった。

「わかったな」

「ああ、それなら」

「こんなことで得意になったらいけないな」
七人で言い合う。そうしてだった。

俺はファンの娘にサインをしながらだ。六人に言った。

「皆も書いてくれ」

「あっ、俺達もか」

「サインか」

「ああ、頼む」

こう六人に言った。

「だから。いつも一緒だろ」

「一緒か」

「それでか」

「ああ、だからだよ」

俺はこう言っただ。まずはそのファンの娘に笑って断った。

「俺だけじゃなくてさ、全員でいいかな」

「あっ、はい」

女の子は俺の言葉を受けてだ。笑顔で話す。

「御願いますか？」

「うん、いいよ」

俺は笑顔で応えた。女の子もそれでいいというのだった。

第三章

「それならね」

「そういうことでね。それじゃあ」

「はい、皆さんのサイン下さい」

「いいってよ」

俺は仲間達に向けて述べた。

「俺達全員のサインでな」

「そうか、それなら」

「俺もな」

「俺も」

「僕も」

仲間達も頷いてくれた。それも笑顔でだ。そうしてであった。

七人全員でサインをしてだ。女の子に渡した。

「これでいいよね」

「有り難うございます」

ファンの女の子はにこにことしていた。俺だけじゃなく七人全員のサインを貰えたことがとにかく嬉しいらしい。それでだというのだ。

そしてだ。女の子はまた言ってきた。

「七人全員のサインが揃うって滅多にないですから」

「滅多にない」

「そうかな」

「いや、普通にあるよな」

「違ったか？」

これは俺もだった。言われてみても実感がない。俺達は今までずっと一緒のつもりだった。しかしそうではないというのである。

「それは」

「気付いたらそうしたらいいんじゃないのか？」

こう言ったのはノツポだった。

「七人全員でのサインを基本にしたらな」

「それでいいか」

髭はそれを聞いてまずは安心した顔で頷いた。

「それなら」

「それなら？」

「それでか」

「後は」

「これをずっとやっていかないか？」

こう六人に話した。

「七人全員のサインを基本にな」

「つまりあれだよな」

弟が最初に言ってきた。俺の言葉に気付いてくれた。

「俺達はこれからずっと七人でね」

「ああ、バンドをやってくんだよ」

俺はここで思わずにやりとなった。そのうえでの言葉だった。

「いいな、七人全員でな」

「それでか」

「それでバンドをやってくんだな」

「ああ、そうさ」

俺はここでまたにやりと笑った。自分でもそれがわかる。

「それでどうだよ」

「つまりあれだよな」

今度は色白が言ってきた。

「虹だよな。七人だから」

「ああ、そうだな」

「七人だから七色」

「虹だよな」

他のメンバーもそれに気付いた。そのことにだ。

「俺達はずまり虹だよ」

「虹は一色欠けても虹じゃない」

「そういうことだな」

「そうだよ。だからずっと七人でな」

俺はまた話した。

「やっていこうぜ。いいな」

「ああ、わかったぜ」

「それじゃあな」

「七人でな」

皆も笑顔になっていた。そのうえでの言葉だった。

「サインも七人」

「バンドも七人」

「何かをするのはいつも七人だ」

「俺達はいつも一緒だぜ」

そう思うとだった。こんなに有り難く頼りになることだった。一人でいるよりも七人でいればだ。それだけでもう充分過ぎる程有り難かった。

そしてだ。またサインを欲しいという娘が来た。

「あの」

「ああ、サインだよな」

「はい、御願います」

「七人のサインでいいよな」

俺はにこりと笑って女の子に尋ねた。

「俺達全員のサインで」

「皆さん全員のですか」

「ああ、俺達のサインはそうなんだ」

今正式に決めたことでもだ。それでも言った。

「だからな。それでいいよな」

「はい、それじゃあ」

女の子はその言葉を聞いてだ。笑顔で応えてきた。

「御願います」

「よし、皆書こうぜ」

「ああ、七人でな」

「俺達のサインをな」

六人も笑顔で頷いてだった。それでサインを書いた。俺達はいつ
も一緒だった。七人で一つ、本当に虹だった。そしてそれは今も。
俺達は七人でいつも一緒だ。

STANDING ON THE RAINBOW 完

2010・6・11

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3198r/>

STANDING ON THE RAINBOW

2011年3月2日21時40分発行